里見八犬傳 拾 四編 巻卅一上

へ13
709
79

門 遠 13
號 709
卷 79

明治三六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第九輯卷之三十一

東都　曲亭主人編次

第百五十回　照文二書を捧て東籓に還る　兩侯衆議を聽て京信を寛む

再説一休和尚名は宗純紫野大德寺の宗曇花叟の嗣法にして出藍の才弥高く禪機悟法に長るゝよりは世に誌れたるのみならず人の知る所へ或は云這活佛は後小松天皇の御落胤なりとぞ。與は儘きれば朝野に遊びて衆生を濟度し與盡れば深く熟睡して坐禪の床に在り。年歳既に幾腸を歷て教化も倒に煩へくやまりけん近曽は錫を行脚に曳とも空えぎりーに。その日甚る風の吹ぬとや獨突然と東山殿を訪ひけるに義政公は閑雅を宗と好たまへば至るとふとも屈請あぐるに。一休和尚の

○秋谿堂藏

伺候者を欽びく沼ぐ元珍客ゑれども。恥く閑室ゆく對面ゑゆひて。親炭を接ぜ茶を薦めく清談ゑ時移る程ゑ一休ハ坐右る菊軸の虎を戸ろへく。その画ハ頃日其主一く風聞あり。金岡の筆ゑハ欲と問ま。亦義政公も俱ゑ菊軸を戸ろへて。原来事皆少知れる然ども又今ゆゑ詳ゑ出るゑ及ぶ。鄙ゆ酷く暴出く洛内洛外を鬧ゆる。変化い即是ゑ我ゆの画虎の来歴ゑ就く疑ひ思ふ義あり。初巨勢金岡ゲ這虎を画ゑ時倘其眼ゑ點ゆる。脱出ること。あるべ。とく胡意點せまとハて。金岡既ゑ未然を査して後ゑ薬ゆ。あらせ。とるべ。何ど鍊鏘ゑを画ゑ添く緊く這虎を較ゆ。当時眼ゑ點せまとて。後の人筆を加ゑく見衆出るゑ至りてハ初金岡ゲ用心も竟ゑ其甲斐ゑ。あらぬ。又意ゑ初這菊軸を辰巳の異風ゑ與る那妖麗の幻童ハ甚る者ゑや或ハ云他ゑ某師の十二神将の第二る寅童子の化現るべ。或ハ云狐狸の変化るゑと皆

推量ゆく明證る。若果して那寅童子の化現るべ。るどて万人の異風這画を授けて後の患を釀しる。倘又狐狸の所為るべ。樵六とやらンゲ狙撃ゆ時いゑゑく其銃頭を免るべゑあるぞかゆ。我是ものるゑ疑ひあり。智識の教を受まく欲ゆ惑ひを釋ゆ。甚麼ぞや。と問れく一休ゑ頷く其疑ひ君のゑるゑく世俗の訝り思ゑ。大くハ其頭ゑそいゑ世ゑ妖怪変化とゑハヨヌくハ狐狸の所為欲然ゑねば人の冤鬼のゑ然ば真の妖怪ハ形ありく像ゑ。壁言ば雨雪の降るゑ如く突然とく顕れるゆ。滅息まるゑ及びくハ誰ゑ其迹を見るべ。鬼神ゑ二氣の良能ゑ天ゑ在りてハ日月星辰地ゑ在りくハ行潦河海七十二候二十四氣の迭代ゑ行るくハ則天地の変化ゑ抑氣候正順るゑハ則是天地の経ゆく不順るゑ。天地の変ゑ。其不順ゑ方りてハ五穀登らぎ。疫厲流行る。是其変化の大なる者ゑ。その餘ハ人の招く処或ハ禎祥と做り或ハ妖孽とるること

あつかをもて外典の教ふも。國家ねふ興らんとまれバ。禎祥あり。國家將ふ亡んとまれバ。妖孽あり。蓍亀ふ見れ。四體ふ動く。禍福將ふ至んとまれバ。善必先之を知る。不善必先これを知る。故ふ至誠ハ神の如しといひけん。我内典ふ所云縁業輪回因果応報の理り。亦是ふ相同じ。在昔宋の徽宗帝ハ。書をよくし。画を能し。詩文琴棋雑伎遊藝ふ巧なるぞとふとなし。只國を治るふ拙し。あをもて賢臣を遠離く。佞人を親愛し。剩風流を事としく。名花奇石をヨヌく集合るが為ふ。是を千里の外ふ求る。運送ふ財竭ぶ民傷あり。其費只億兆のミならぞ。あの故ふ外冦屡境を犯し。賊民山東の宋江及方臘の類も亦ヨヌくあり。遂ふ宮中ふ妖孽起り。黒眚夜々見るふ及びて。是ふ觸る宮嬪ハ。即死ある者甚多かりき。竟ふ國亡あ及びそ。那身ハ父子共侶ふ。金國ふ拘れて。旅魂夷狄の鬼と做ぬ。亦悲しからぞ。那黒眚ハ形状牛ふ似たり。最黒けれど分明なるぞ。よくこれを見てしといへり。今の瞳の画虎妖も。亦那宋の黒眚と日を同くして語るべし。と憚りふ侍れども。拙僧直言仕らんハ。ちでよく御心を推鎮めて聞召せ。君も亦只風流をのミ年来旨とせられて。給ぐく死貨を弄びあぶ。故ふ民の父母たる國政ふ疎なるハ甚麼ぞや。あの故ふ応仁の内乱起りて。官庫の史傳諸家の舊記ハ。兵火ふ隻字も残る者なく。故典傳らぞ。做るあめら。君ハ名物の茶碗一箇を損ひし。思ひすしも做しあぞ。猶奢侈ハ弥増て。茶ふ躭り奇を好で。さく珍器を玩びあぶ。一器の價を同ふとえハ。萬銭萬々銭も足れりとせぞ。遂ふ先君鹿苑院殿義滿の顰ふ倣せあひて。這銀閣を造営あり。民の膏腴を絞り盡して。京師ハ野邊ふ似たれども。尚御心ゆかずあらぞや。幸ふして當將軍義尚ハ賢明ふおハしませバ。君が驕樂ふ懲あひけん。曾て儉素を事とあて。乱を撥め。残ふ克ちまく思欲まるを深切なるも。大乱久しき後なれバ。猶るふ力足りあで。諸侯朝せぞ。権臣ハ尚恣ふして故の如し。それすしも君ハ蓋なくて只

文溪堂藏

茶法ゐのミ故実を正しく。諸侯の順逆をたゞしゐ。拙僧在茲恐るゝ事あり。
後世も亦富貴の家豪民の子弟ゝ義尚公の賢明ゐく儉素ゐ御坐ゐるを
ヨヲくゝ知るを。知れども思ひを又只君ゞ頻華ゐ倣ふく茶ゐ嗜むも嗜ざるも故くそ治か
たゞ東西をのミ貴びく。是ハ東山殿の御物之彼ハ義政公の御枕の形よなゞど喋々
ゐく其奇ゐ誇ゝ可惜錢を費せども猶飽ぎ甚しゐ至りてハ産を破り職を
喪ひ民叛ゐ國削られ車ひゐくて亡ざるも訓りを又後ゐ鑑ゐ者必無とまゞうぎを
蓋茶の湯ハ清貧閑雅の小集ゝ甲なれ乙なれ有ゐ儘ぜそよく是を用ひても
茶人の本意とハゐべけれ然るを高閣臺榭ゐ美を盡し治くゐ貨を弄びて志を
失ゐを閑雅の真面目とゐゞゐ。世より儔ゐ君這驕樂をもて後の指南ゐ倣ふ
ふゞゐ珍器奇石花卉故書画をヨヲく集合く民を傷るを尚飽ぎ思召もと
既ゐ年来ゐるをもて民の怨と鬼神の怒りの爭ふ發くゐ相蘊りそ那妖艶の幼童ゐ

変りゐ又ゐ瞳の画虎と見まゝ世を歳め人を驚ーたりけるを尚曉得ゐぎーて。
反く那幼童の出処を訴り且虎の眼ゐ點せざりける用心を詰りゐふハ醉の中ゐ
醉ゐて迷ふゞ上の惑ひゝ丈以ゐべ一切衆生の眼ゐるもヨヲくを瞳るゐが如し。
あをのく書を看れども文義を悟くゐ是を名つけく文盲と云甚しゐ至
てハ一字不通の無筆あり是より下ハ五と石と菽と麥とを分別せゐ視れども見
えぬ指せども知ゐ是等ハ眼あるゐぐら眼の用を做さざる者ゐそよく思へを皆瞳
子るゝ豈只這画虎のミゐくんや。ゐの故ゐ内典ゐ般若をのく菩提の一義とを
般若ハ即大智慧ゝ智ハおのづくゐ知る義ゐく慧ハ即悟るの義ゝ又外典ゐ
無明の醉の醒さ除ゐ。業々として未見ざる。狗子の如しといゐるも是ゐる君ハ俗ゐ云
物數奇ゐく新奇を好ミゐる且珍器故物の御鑒定ゐ御眼力を富ゐ人ども
民の憂の見えゐるゐ瞳ゐ画の虎をのミ怪ミゐハ是も亦御惑ひゐ也。

這ゑ瞳の画虎ゐ人其眼ゐ黙せてより忽地ゐ眼を出す。世の人を恐嚇せり。
よく思へば相似たるあり。譬ば本性奸佞ゆく且邪智ある者。或ハ亦庸才な
るも愍ゐ漢学して眼其用を做さと死ハ心高慢り已ゐ惚す博ゐ誇り俗を欺
犯利を尋ね名を衒ひ。反て身を脩め心を正くし。家を成し道を行ふ真れ
学問ゐ疎ゆく只世俗を非と賤めく。身ハ是魔界ゐ在ると思ふ甚しきゐ
至りてハ乱を起して刑せられ衆と挙ふく兵ぜるかくの如き白物の悪名を貽さ
如ハ瞳子るゐ。這虎の眼ゐ黙して遂ゐ那禍事を惹出せと亦年を同くも
論ぶべし。嗚呼造化の小児の為段去処。禎祥も徒ゐ臭くぶ妖孽すも徒ゐ起ら
ぶ事勸懲ゐ係る所。誰か這深意を知んや。是ゐ由くこれを視れば這虎実ゐ
巨勢金岡の肉筆なる。神明佛陀の霊画なる歟人も沒知ぶ。我も沒知ぶ。知
ぬを強く説を做して原故を究んと欲まるハ是愚ひのを蓋虎の猛悪なるも瞳

るければ人を傷ふ。人の性の美しくるも見ぜ知されば倒ゐ易る。然れば瞽者ハ
反く具眼の俗ゐ勝りて富戸ゐ博識ありて家を奥まも勘くるも眼目の資
助ハ人ゐよるべ。君果して妖艶の幼童の出処と瞳子の虎の画工の用心を知
まく思召さるべ。君ゲ年来の御行状を省みゐ思くとるし疑ひのふとりと席を
拍ち面を犯して忌憚る所る。談義数刻ゐ及びしゐ義政公ハ慢然と醉るゲ
如く醒るゲ如く且双り且差く。黙然ると半晌許。熟と克思へば智識の教
化至妙ゐして是ゐ優たる鍼砭と思ひ復しゐ怒を醫く。一休ふち向て感
謝ゐ堪たる。宏論明辨老和尚ゐ諫るゐ犯してかくの如く
言を盡さんや。是則我ゲ為ゐ釋氏の比干と覚ぶ珎器故物を排斥けく奢
侈を省ひ倹素を宗とをく。のて瘦る民を肥さん然るまでも這ゑ瞳ひ虎の菊
軸を。その伜後まで存せるべ好事の者又眼ゐ黙して復禍を惹出さん欲られも

あの段上ふ　一百四十九回の繡像と併見るべし

亦料りかたし。あるいはくよろこんや。と問まそ一休笑ーげふ君御志を改めて道ふ稱せのひ。這虎自然と滅却く復出ることを。べ。去れども正可ふ往方を見ず。猶御疑ひを送まふ。似う。這虎筆下の墨迹ふれども既ふ是狀體あり形體ある者法を聞く成佛せむとふとも。いでく濟度仕らむと答て躾く拂子城含ゆく。身を起しく徐やふ蒭軸の虎ふ打向ひく。則偈を說く道く。

噫玉眼木佛。無學之人視而不讀讀而不通勿笑無筆與文盲水母無眼鰕子技之多目鰻鱧眼不爲用江湖億兆賢不肖誰知無眼之勝於有眼汝元來是何物也筆下墨迹無瞳畫虎狡兒點眼忽謔世神童射睛則入絹妖乎怪乎神乎鬼乎一來一去休索出處人面獸心人非人獸面人心有此虎造化小兒多機關以心傳心

是偈句不押韻便是倣繼譯佛經之例云

不立文字。寫眞寫生。畫亦非也。有像無像本來空。鼓腹管心無一物。苦海愛河迷孰之深。一言導衆盲彼岸遠群犬吠於聲此岸闇中流風濤不可涉。迷悟在人豈有干汝耶今我採一炬以爲烏有始可與入無爲也。喝。と說訖く。一息吻と吹かくれば。其息忽地心火と做りく。虎の画幅ふ移ると見るべけふ那時遲。這時速。蒭軸ふ立地ふ燒亡く。軸さへあらぎるーる。義政公ハ吐嗟とだるふ見ゆ。驚馬ふ程ふ一休早く坐ふ復りく。義政公ふ稟まる。目今亦肉せーでく。理納那虎を教化して既ふ是ふ爲ふ入り。誰ふ又眼ふ點して世を開まる由わらんや。願ふの愚直の諫言を後々まで忘れぬで費を省て儉約を旨とく。民の塗炭を憐ゆく。怪異是より滅息く。鹿を走らも悔るふべ。稟えとハ只是のゝ做もべるも做ーー果つ。身の暇をゆるべ。とのりく躾く身を

起して。飄然とゝく退のけり。義政公ハ又その一奇よ呆れて一霎時忙然とうち見
送りの程ふ。忽地ふ心つゞく。御後方ふ行らる。近臣熊谷猿二郎直次一色駿馬
幸通等をとゝくゝく。若們ハいかふ思ひけん。那一休ハ隔昨歳（明応十五年）の冬十一月正一く
遷化の由ゝあり。今亦那身ふ来ゝ。我を諫めゝ成まるゆゑ。ハ夢歟現
歟怪しけれと。訴りのへ。直次幸通言語弁一稟まう。臣等も亦那和尚の宏
論明辨を憶ぼ聽聞仕りゝ。隨喜渴仰の思ひを做せるのゝ。遷化のゆゑハ
心も屬ぼ。仰よりゝくゝく思へば。実ふ世を去りゆひ。今茲ハ既ふ三稔ふ成
ぬ。近曽樵夫あり。洛外の北山ゆく。一休和尚ふ逢ひ奉ひ者のひとりを
虚説ゝんと思ひふ。原来那和尚ハ今尚死ゝで在まる歟。ゝ。ひと答
まうせば。義政公ハ。然ゝりく。と頷ぎく。其言思ひ合まるゝ。往日我語次ふ
博士小槻雅久ふ。ゝけゝ。唐山ゆく仙術を学ぶる者死まるふ及び。実ハ死ゝ

悄地ふ柩を蟬脱して。深山幽谷ふ。躲まて人間ふ還らゆゝ。是を名つけて尸
解と。佛者ハ亦その事あり。達磨の如ハ即是人在昔菩提達磨ハ流支
三藏ふ毒殺せられゝ。遷化して三稔の後魏の宋雲ゝ使を奉りく。西域ふ
ける帰路ふ葱嶺ゆく。達磨の履一隻を携ゝ。翩々として来ゝふ逢ひけり。
師ハ那里へ往ゆゝ。と問へば。西域へ還ると云且汝ゝ主ハ既ふ世を厭りと。生て別
と去りゝ。宋雲本土ふ還るゝ及びく。明帝ハ既ふ登遐く。孝莊位ふ即ぬ。
孝莊達磨の事を学ぶく。怪しゝ。壙を啓ゝく見るふ果しく那身ハ在ぎる
ゝく。一隻の草履ありと云ふのゝ高僧傳及傳燈録ふ見えゝ。と学ぶ。
其後達磨ハ入東して。權且我邦ふ在り。聖德太子と贈答の歌をゝける。
片岡山の飢人ハ達磨の化現と云這小説ハ載て虎関ゝ元亨釋書ふ
在りとぞふる是ふ由ゝくれを思へば一休も亦尸解ゆく。遷化ハ実ふ死せゝ

身は猶大山に在りるごとく。京師のるをよく知らく。我を諫めく惑ひを解け且霊画の虎を焼化しく。奇を好む者の眼を空だ口を鉗めく。疑ひを後にあらせずとその善巧方便顧れば宜ま尊し又権者の心火をりく。物を燔くもの先蹤あり。在昔釋迦の徒弟加葉佛は西域二國の閑戰を和解るに二國の王聴ざりければ加葉は河上より身を飛し雲に騰りて則身より火を出して自焼しく寂を示して玄常迅速の理りを論せしかば其二王懺悔してこれと伏せて和睦しつ二國の民幸ひに命を免れりと云ふ某甲僧正の茶會の餘談なりけるを。今又思ひ合しむ。祫と云恰と云権者の慈悲も方便量少なれば我が年来の愆とそ悔しけれ。恁もあらん狡きのふまぐ世の憂愛ものを忘れ草今我上にのぞ搦く見んとうち詠ずのふふそ直次と幸通ら。倶に額を衝沁感服して御歌いまうまもけらえ御意の趣。是に的當文

この義政公の歌は後太平記に載せると大同小異なれど彼に併せ見るべし

事に疎沁臣ども。御教諭によりて。疑ひの挾霧は風の拂ふが如し。好学向を仕アあと稱稟せば義政公も快げに合笑く。霊画の虎の亡しに愛惜の念ひ。

なりけり。休題更説是年安房の稲村の城内あれ七月の時候京師へ使を奉りける大江親兵衛蜑崎十一郎及姥雪代四郎ども三河の苛子崎に。歌舩あける折海賊對治の事の顛末は親兵衛並に照文が伴當直塚紀二六をもて既に聞あり。且紀二六も又主の迹を慕ひく京師へ赴沁しより後の事は久しく信あらざれば。知るよしもなしやしに秋も欲盡ふるし時候獨延蜑崎十一郎照文が暇兵五名と伴當夫役们を領て歸舩安房の洲崎に著沁しらば照文則稲村の城に参上りく。京師の首尾を少え上げ且君侯義成に拜謁しく。宣旨と御教書を渡しまるらせく。猶且大江親兵衛は管領政元主に抑留られく。倶に還るとをゐざりしようと告なるに義成主

文溪堂藏

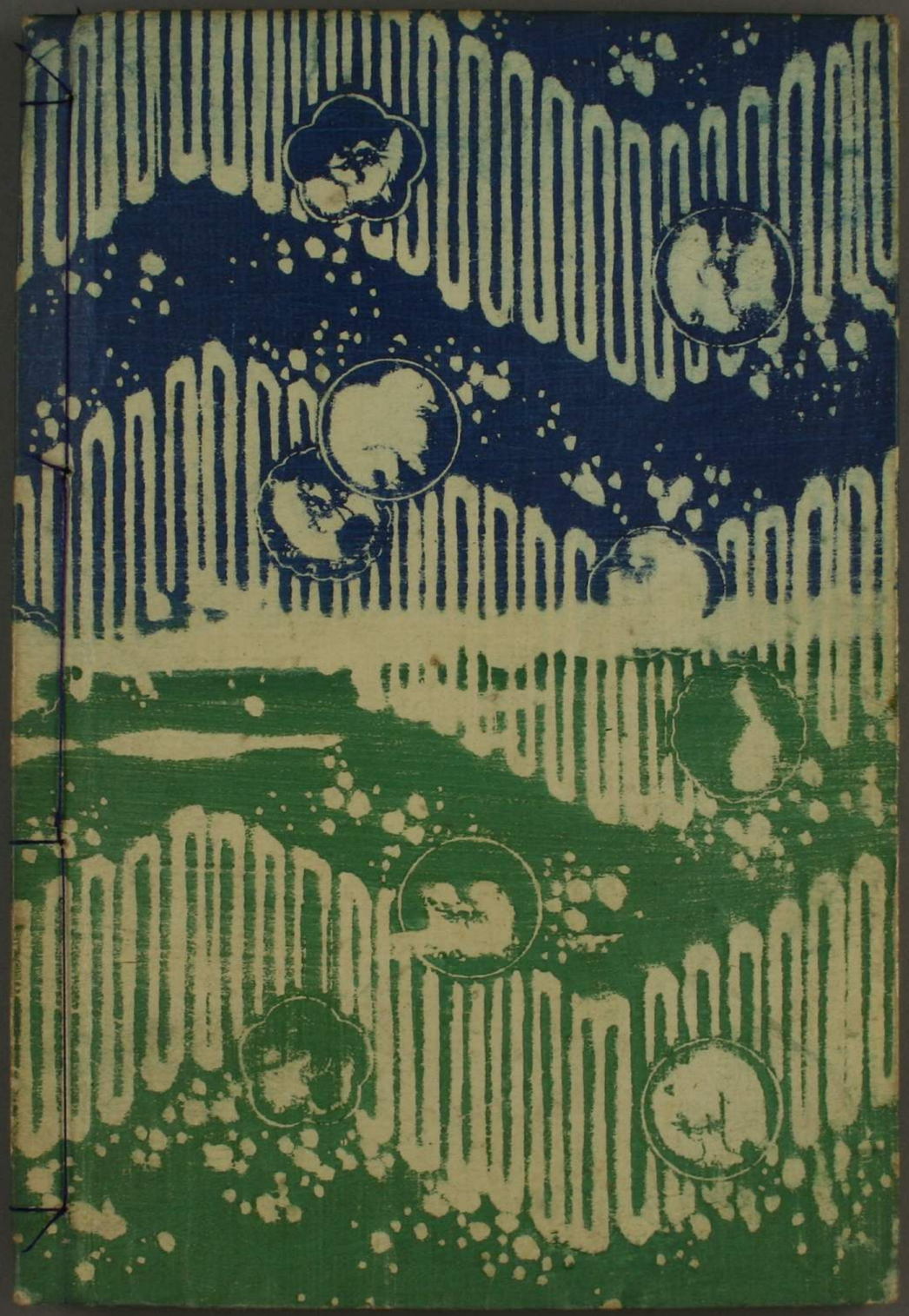
驚死ぬべく。あらべ徑ふ瀧田へ參りて早く老館義実へ告げまいらせぬべ。照文隨即瀧田へかへり參りて。義実主ふ告げる。その言異るべくもあらねば言省く具ふせず。約這一椿事ハ只照文の口狀のみにて親兵衛ゟ書あり。又七犬士と大毋妙真を慰る消息も。その時ふ届けべく。義実主を首ゆく。妙真音音曳ゑ單節を。ちらちらえ七犬士も倶ふ眉を顰め。胸安かるぞ思ひけり。是より第三日ふ至りて。瀧田の老侯稲村の城へ來臨あり。その義昨日より。その次ぎえあらーべ。両家老東六郎辰相荒川兵庫助清澄並ふ杉倉武者助直元を奉りて。御食応の准備あり。その日。犬塚信乃成孝。大山道節忠與。犬川莊助義任。犬村大角礼儀。犬田小文吾悌順。犬飼現八信道。犬坂毛野胤智ハ、大法師と倶ふ召れーべ。各八公服を整く。辰牌より伺候しつ。又蜑崎十二郎照文も召されて瀧田の老侯ふ從ひまつりて。巳牌時侯ふ參ぜけり。恁而両侯席ゆく。辰相清澄を奉り。則、、大と七犬士を召とせけり。登時義成主ハ仟の一僧七士ふうち向ひて。今番願ひのまゝ八犬士の氏を金碗と勅許あり。且宿祢の姓を賜ひしを宣示ーゆべ辰相則宣旨と御教書とうち啓ぜ聲朗らふ讀聞しつ。且其二通の寫本を、大と犬士ゟふ遞與ーけり。當下七犬士ハ倶ふ謹く拜聽ふ訖く一様ふ席を避けて。両家老辰相清澄ふうち向ひて。勅びを禀ゑゆ。尚親兵衛ゟかへり來ぬ今ふの席ふ足らぬぞを。送慽くゑ思ひける。开ゟ中ふ、大法師ハ只唯々とのゝ言兼あつ。七犬士と共侶ふ遠侍へ退りけり。恁て又義成主ゟ。蜑崎照文を召よせて。衛ふ上京の使首尾宜く正副両役を兼帶ゟ。遥けぬ水路の障りゟ。かへり來ふけるを。特ふ大義ふ思召とて。其勤功を誉させて時

義実主　義成　同

服二襲と黄金二十枚を賜りけり。既ふして時移りふければ。席を更めて。老侯ふ饗饌を羞めて、大召れて。相飯さて又別席ゆく。照文ふ酒飯を賜ふ則七犬士を相飯ふせらる。その折も亦犬士等ハ親兵衛が一人欠るを言ふて出さず。各各いと慨しく思ひけり。恁而饗饌果しなば両侯ハ閑室にて稍久しく密談あり。其後又照文と七犬士と、大法師を召させのふ、大ら。既ふ退りぬと雪えてくば俱ふ微笑のふ、ふて召も返させも照文と七犬士ハ躰く亦見参も。當下両侯ハ先照文ふ京師の光景及政元の人と為り。又犬江親兵衛が先見遠慮の言の顛末及蛾雪代四郎が情願其甲斐あるやと苛子崎のゆまでも語らせく。听のふと半晌許。其言果て却親兵衛を請返さ。便直を七犬士等ふ向のへば。道節答て。去の爰ハ臣なるも故ふ胸安くもぞいへば。昨日終日。額を衰めて。商量仕りひひふ丞

ありせん。彼ふ似て。とらひて。備を立てへれば。信乃が。ふ。言あてうあくふへども。親兵衛ハ。凛ふ。其儔ふ。ふ。我們七名。浮浪六年。百折千磨の艱苦を嘗て。竟ふ天日を見る。今の栄あり。獨親兵衛ハ同じくも他ハ衆兄弟ふ拔出て。夙く仕ふるふ及ひて。小厄あり。妙椿狸児の妖術ふ中られて。御疑ひを受て。幾程なく召復されて。素藤對治の全功成りふ這回も亦上京の御使を速ふ成し果て。障りなくかへり参らば。その福餘りあり。是則天理なり。盈るを虧ゆ。ふ。といへば。荘助も亦ふ。臣も。偽聞ふ縁て。猜しふ那管領が。台命を佯唱へて。親兵衛を豪猟ふ。その口ハ其武勇を愛るの故のみ。害心あるべくもあらば。厄の解るを。俟せゆふ。とのふを小文吾ふ。外任ぐ。臣ふ及ぶ。親兵衛が神々ふ。仁

義の外ハいかゞ。非如政元主他を最愛ゝく。則食ゝるゝ大禄をゝく係
ゝく欲ゝるとも他いかゝく开を甘ゝひて二君ゝ仕る者ゝゝんや。まの美々御心
安ゝるべゝとのゝを大角諾ゝひく。臣ゝもゝが愚意も異ゝるゝとゝゝ。昔者前漢の
蘇武ゝ如ゝハ胡國へ使ゝゝく。拘ゝゝと十九年。厄解ゝく還ゝゝ及びく。麒麟
閣の功臣ゝ數ゝゝられゝと云故事さへ思ひ比べゝゝ。今の親兵衛ハ同ゝゝゝ
ゝ。京師ゝ淹留両三月。いまゝゝ久ゝゝゝゝ。慈禀せゝ薄義ゝ似ゝゝゝ。鳥
なゝ籠中雪友を慕へゝ。周公旦ゝゝゝ誰ゝ兄弟の急難を悲ゝゝ。
心の憂愛の忡々なるもよく思へゝ時を俟ゝゝゝ窮達時あゝ。得失ハ命ゝ縱
那身を水火の中ゝ置ゝとも親兵衛ハ恙ゝゝゝ。靈玉の神護あゝ又蛣
雪代四郎直塚紀二六ゝの幇助ゝゝゝゝ。其窮阨蘇武ゝ十九箇年ゝ。
似ゝべゝもハいゝ。とのへゝ現ハその語を繼ゝく。臣ゝゝ只ハ那威勢を憚ゝゝゝゝ

ゝ。実ゝゝを出ゝゝく。意味ある故ゝゝの如ゝ。昨日衆議仕りゝも大歴ゝ
是ゝ過ゝゝ然とも猶御心許ゝく思召さゝ。間諜児を遣ゝて。那里の要を
探ゝ御計ひゝゝゝゝ。欲ゝゝゝゝゝの外ゝハいかゝと異口同様ゝ
議ゝけゝを両侯つらくゝち少ゝひく。義成主宣ゝゝ。現間諜児の一條ハ。
那里の吉凶を知る捷徑ゝく。徒ゝ物を思ゝんより慰ゝるゝもゝべ。但
毛野ハ知音嚢の少ゝゝゝゝ。今一言も出さゝハ另ゝ思ゝゝゝゝと問ゝく
毛野ハ頷を衝ゝく。否臣ゝも亦前條ゝ異ゝるべくもいかゝ。遮莫間諜
使の一義ハ便りゝゝゝゝ似ゝゝゝゝ。陸中ハ処々ゝ新関ゝゝ。水中ハ亦風濤の
障ゝゝゝゝゝゝ。往復坂東道一里九百里ゝ餘り。京師の機
密を探ゝとも其使翼ゝゝゝゝ。今日少ゝく。明日告ゝゝ術ゝゝ
べもいかゝ。加旃事ゝ觸ゝく。京家の人ゝ知ゝゝゝゝ。親兵衛ゝ還

るべし。略絶えて。且御為ふ妙なるべし。あるべし。狡料りかさうり。然るを今現八が件の一議ふ及びしは。是已ことを沼ざるのみ。他が本意ゆいはつゞとらふを義成うちゆつゆひく。ものうべ今亦いふせんや。と問れて毛野又稟もやう。他羨ゆひ。旦襄ふ素藤を征伐の日只寛の一字をもて。御方の士卒を損ふことなく。全勝を沼ゆひける。賢慮を仰ぐなるふ。這回も亦寛の一字ふあくことゆは。べし臣ら今朝しも周易ふ憑りて。親兵衛が歸囲の遲速を。惜地ふ考ひしふ遲くとも年の内ゆは必や信わうん。姑且閣せゆとらふ。七士一致の外るけまべ。側聞せし照文も理りとを稱えける。ゆの時すでも義実主ら默然と沙果て。義成主をアクヘりて。安房殿も同意るべ。我親兵衛が還るを俟ゆと。一日も千秋の思ひ。れども。せん樹るを爭何いせんとらゆ。嗟嘆ふ堪ゆは。義成主ハ云云。とゆと正首ふ慰めて。別説ふ及びゆひけり。